

1978年度

駿台史学会大会

研究発表要旨

駿台史学会

1978年12月9日

於 明治大学大学院南講堂

＜禅的世界観の展開＞序編

船 岡 誠

禅的世界観とは、「禅僧」のもつ世界観のことである。世界観とは、「人間が自己と外界とについてもう一つのまとまった見解」である。

本報告の最終目標は、日本禅宗思想史の構築にあるが、あえて「禅的世界観の展開」と名付けたのにはそれなりの理由がある。第一に、禅宗思想史の思想史への解放というニュアンスをこめていることである。これは、従来の禅宗思想史が＜禅風＞＜家風＞という視角から追求されることが多く、その限りでは思想史という共通の場にのりにくかったことへの反省によるものである。第二に、宗教思想史の眼目はやはり“信仰体験”の追求にあると考えるが、もともと主観的なものである信仰体験を学問の対象にするためのひとつの試みでもある。信仰体験の主観的側面を無視せずに、可能な限り客観化しようとする意図をこの世界観という言葉にこめている。

そこで、そうした禅的世界観を究明する方法論めいたことを述べるならば以下の通りである。まず対象はあくまで“歴史的個人”としての「禅僧」の世界観でなければならない。“生きた”思想（世界観）はその人物の生涯に正当に位置づけられてはじめて可能となるからである。次に、禅的世界観を究明する指標として以下のように考えてみた。

1. 仏教論（仏法論）

- (1) 禅宗論（禅宗選択の根拠およびその意義）
- (2) 仏教論（他宗・他教との関係）
- (3) 大悟観（禅の存在様式論として）
- (4) 教団論

2. 世俗論

- (1) 世俗論（世俗一般に対する認識）
- (2) 外護者論（外護者に期待・要求するもの）
- (3) 聖俗論（世俗に対する禅僧・教団の存在意義）

3. 政治論（王法論）

- (1) 王法仏法論
- (2) 政治権力との関係
- (3) 理想的国家論

右の指標によって、日本の古代から近・現代にいたる禅思想の展開のあとを究明したいと考えている。今回の報告では、とりあえず古代における禅として比叡山における禅の伝統、中世初頭の禅宗台頭期の例として曹洞宗の宗祖道元（1200～1253）、禅宗が仏教界に市民権をえて十宗体制として確立しつつあったころの例として五山派の祖ともいべき夢窓疎石（1275～1351）、幕藩体制の確立した近世中期の例として現代の臨済宗の法系がほとんどこの人に溯るといわれる白隠慧鶴（1667～1750）をとりあげて、それぞれの禅思想さらには＜禅的世界観の展開＞の一端を示したいと思う。

戦国時代楚国の権力構造をめぐって

岡 田 功

戦国時代の楚国についての言及は、史料そのものの制約性のため、今までそれほど多くの研究が積み重ねられて来たとは言えない。特に戦国各国で行なわれた変法について言えば、代表的な秦の商鞅の変法を除くと、研究史上取扱われた変法の数はそれほど類を見ない。

さてそこで、戦国楚国の権力構造の性格を考える上で、呉起の変法の果たした役割は大へん大きいと思われる。その内容を概略的に示せば以下4点になろう。①急ぎ必要としない官職や公族でも疎遠な者達を退けることで、節約された財を戦闘の士の撫養に当てる。②「私門之請」を塞ぎ、楚国の風俗を統一する。③「貴人」を辺境の広虚なる土地に従し実し、その地を開墾させる。④楚国で今まで用いていた垣を築く方法を改めさせ、新技術に基づく方法を施行した。

またさらに、楚国の生産構造は、中原の進んだ各国の華北畑作農業と異なり、所謂「前年の枯草を火で焼きはらい、そこに水稻を直播し、発芽後稲苗が7～8寸に生長したときに雑草を刈取り、水をそそいで雑草を枯死させる」（西嶋定生氏による）火耕水耨と称される原始的稲作農業であって、生産力の向上を全体的に高める段階に至っていないという特殊性を持っている。それに、宇都木章氏の分析による如く、楚国には有力世族が戦国期に入っても多く存在し、楚国の権力内部に大きな影響を及ぼしている。主な世族をあげれば昭氏・屈氏・景氏らである。

本論はこれらの楚国の特殊なあり方に、呉起変法がいかなる役割を果たし、また、楚国の持つ如何なる限界性の下で権力構造が支えられていったのかを明らかにしてゆきたい。そして、以上を通じて戦国楚国史の展開過程をも合わせ探ってみたいと思う。

ウガリト王国の土地所有形態

— 王からの付与地を中心として —

武 藤 滋

I はじめに

- i) ウガリト研究の現状と展望
- ii) 土地関係文書の類型

II 不動産保有・所有権について

III 土地所有形態 — 仮説と問題点 —

IV 結びにかえて

ウガリト王国紹介

今日の北シリアの地中海沿岸、ラタキアの北約11Km、ラス・シャムラ(「^{ういきょう}回香岬」の意)に位置するテル(遺丘) — 古代のウガリト市 — を中心として、地中海とオロンテス川の間
に推定3,000~4,000Km² (我が国の埼玉県ほど)の領域を占めた小領邦国家、これがウガリト王国である。北にアナトリア、南にエジプト、東にメソポタミア、さらに当時の銅の生産地キプロス島を対岸に控え、この地の利を活かして古代オリエント世界有数の商業拠点のひとつとして繁栄した。

ウガリトの名を歴史上最初に留める文書史料はマリ文書およびアララフ(第Ⅶ層)文書であり、前17世紀後半にはこの王国が既に存在していたことを明らかにしている。続く史料はアララフ(第Ⅳ層)文書およびアマルナ文書であり、後者によって前14世紀前半までのウガリトとエジプト(新王国第18王朝)との緊密な関係が知られている。この後王ニクマッドウ2世の治下、ウガリトは他の北シリア諸国とともにヒッタイトの宗主下に入る。そして王アンムラービ治下の前1200年頃、ミケーネ文明、ヒッタイトを滅ぼした印・欧系民族の大移動により、時を同じくして滅亡する。鉄器時代に入るとともにこの地は以後まったく見捨てられ、それがかえって遺跡、史料の保存に幸いすることとなった。1928年当地の農夫による偶然の発見物を契機として、シェーファー C.F.A. Schaeffer を隊長とするフランス隊が

1929年から本格的にテルの発掘を開始し、予期せずウガリト独自の楔形アルファベットを用いたタブレット(粘土板文書) — ウガリト語文書, 1930年解説 — を発見するなどの大成果をあげ、調査は王宮址を中心に進められて現在もなお続行中である。

ウガリト文書は前述2王の間の7代、およそ前14世紀前半から前1200年までの約2世紀間に作成された王宮文書(一部私文書)である。外交文書, 法的文書, 経済文書, 書翰, 宗教・文学文書, その他が含まれており, 現在までにアッカド語約700枚, ウガリト語約1,300枚, フルリ語約40枚の他, ヒッタイト語, シュメール語, キプロス文字各数枚のタブレットが、『ウガリト王宮』*Le palais royal d'Ugarit*(PRUと略記), 『ウガリティカ』*Ugaritica* (Ugと略記)のシリーズ等で公けにされているが, 発刊予定にありながら未刊のものも現在残され, また発掘の進展によってはより一層の文書出土も期待される。なお史料は発掘速征回数+出土資料番号の他, 便宜上各史料集内の出典番号をもって引用される(ex. RS18,500=PRU VI 30)。

遺物からみた先土器時代の集団

安 森 政 雄

日本最古の石器時代である先土器時代の人々は、普通、血縁でむすばれた少人数にわかれて、移動しながら狩猟・採集の生活をおくっていたと説明される。しかし、先土器時代の場合、考古学的な資料から具体的に、集団の移動をうらづけたり、移動する範囲・地域や集団の大きさ等を知ることはなかなかむずかしい。

先土器時代の次の時代である縄文時代では、生活の場所を直接示す住居址や炉址が残されており、集団や集落を研究する有効な材料とされている。これにくらべて、先土器時代の遺跡では、縄文時代のようなはっきりとした遺構はみられず、数ヶ所から、石器群や河原石のまとまりが発見される例がほとんどである。前者を地点分布と呼び、後者を礫群といっている。

地点分布には、石器製作の痕跡とともに道具とされる石器等が残されていることから、そこが生活の中心であったろうと推察されている。さて、そうした地点分布を材料として、先土器時代人の生活を具体的に知ろうとするとき、どのような方法があるだろうか。

現在、二つの方法がすすめられている。一つは、地点分布に残された結果に注目し、そこにある石器の種類や道具の組み合わせ、さらに数量の差から考えていく視点である。例えば、それが石器の製作の場であったろうとか、獲物の解体処理の場であったろうとかの予測がえられる。もう一つは、地点分布が残される過程に注目し、そこから石器群のうごきをとりだそうとする方法である。われわれがとりくんできた方法である。これによって、遺跡内の人のうごきや集団の移動さらには集団の大きさの一端を知ることができる。ここにその方法と、研究成果の一部、そして今後の見とらしについて述べてみたいと思う。

I 地点分布について

- ① 遺跡と地点分布
- ② 地点分布の性格
- ③ 地点分布と石器の製作

II 石器製作作業の復原

- ① 石器製作と母岩
- ② 母岩の復原
- ③ 母岩の資料化（個別別資料）

III 石器のうごきと人のうごき

- ① 個別別資料の類別と石器のうごき
- ② 石器のうごきと地点分布
- ③ 石器のうごきと遺跡

IV 先土器時代における集団研究の問題点

以 上

都市銀行の支店配置と「金融の地域構造」

藤 田 直 晴

資本主義の発展に伴い、生産機能と管理機能の空間的分離が進行してくる。また、商業資本の役割も増大し、都市は不生産部門の集中によって寄生性を強めてきている。特に、首都東京において、独占的銀行資本や独占的産業資本の本社、あるいは国家機構といった「中枢管理機能」の集積・集中に伴い、この傾向は最も著しく現われていると言えよう。独占資本は、他方において、支社・支店、支所といった「補完的管理機能」を全国諸都市に階層的に配置してきている。さらに、「中枢管理機能」と「補完的管理機能」の立地・配置を基軸とした生産機能の合理的配置をも進めてきており、国土の集約的・組織的支配の意図のもとで、中央集権的・階層的な地域秩序の形成・強化を進めてきている。

このような金融資本による中央集権的・階層的な国土支配の頂点に位置する首都東京の物質的基礎は、産業独占資本の本社集中に伴う所得の集中において、また、財政・金融機構を通じる資金の集中において把握することができるであろう。

本報告では、この物質的基礎を構成している金融機構を通じる資金の集中について、「独占的大銀行資本」といわれる都市銀行に焦点をあてて分析していきたい。これによって、現代日本資本主義の地域構造の一端でも明らかにできれば幸いであると考えている。

構 成

はじめに

I 都市銀行の地位と役割

II 都市銀行による支店配置の地域的推移

(1) 店舗行政と支店数の推移

(2) 支店配置の地域的構成の推移

(3) 支店設置・廃止の地域的展開

a 国土レベルでの展開

b 大都市圏レベルでの展開

(4) 支店廃止に伴う勘定移管の諸形態

a 市町村間の移管

b 銀行間の移管

III 都市銀行による資金の地域的循環

(1) 預金・貸出金の地域的構成

(2) 資金過不足の地域的展開

(3) 資金の大都市への集中

む す び

主要参考文献

- ① 北村嘉行・矢田俊文編「日本工業の地域構造」大明堂，1977年
- ② 野原敏雄・森滝健一郎編「戦後日本資本主義の地域構造」汐文社，1975年
- ③ レーニン，宇高基輔訳「帝国主義」岩波書店
- ④ 谷田庄三「現在日本の銀行資本」ミネルヴァ書房，1975年
- ⑤ 野口祐編「日本の都市銀行」青木書店，1968年
- ⑥ 銀行労働研究会・独占分析研究会編「日本の金融独占（上・下）」新日本出版社，1972年
- ⑦ 有沢広巳監修「日本産業百年史（上・下）」日経新書，1976年
- ⑧ 佐上武弘編「転換期の銀行」金融財政事情研究会，1971年
- ⑨ 日本共産党中央委員会経済政策委員会「日本経済への提言」日本共産党中央委員会出版局発行，1977年
- ⑩ 後藤新一「都市銀行」産業界シリーズ76，教育社新書，1978年
- ⑪ 荒川滋・斉藤暢宏「金融界」産業界シリーズ6，教育社新書，1977年
- ⑫ 高橋伸夫「わが国における金融の地域構造」山本正三編『巨大都市化に伴う空間生態の変容に関する研究』昭和49・50年度総合研究（A），1976年
- ⑬ 川口弘「金融の地域構造」金融ジャーナル，1961年5月号